

学校におけるいじめ内容の特徴に関する研究

—大学生に対する回顧調査を通して—

大原 さつき* 田中 謙†

The Type of Bullying in School

—Based on the questionnaire survey for university students—

OOHARA Satsuki TANAKA Ken

Key words: 学校、いじめ、大学生、回顧調査

要旨

本研究はY大学の学生に対して学校段階ごとにいじめ内容に関する見聞体験を明らかにするための質問紙による回顧調査を実施した。

その結果、学校段階が進むにつれいじめ内容に関する質的な変化が見られたこと等が明らかとなった。

そして結果を基に、いじめのジェンダー差の存在が認められるものの、精神的いじめと身体的いじめという単純なくくりで見るのではなく、個人の背景にあるものやその時の状況等多面的にみて対応しておく必要があること、従来のいじめとの共通性がみられた「ネットいじめ」では、媒体の違いに留意しながらも、従来のいじめ対応やいじめ研究で重要だと指摘されている視点や対応策などを参考にすること等があること等を指摘した。

I 問題の所在と研究目的

1. 本研究の目的といじめの現況

本研究の目的は、性別によるいじめ内容の違いについて特に女子児童生徒に着目し、女子児童生徒のいじめ内容の特徴を、学校段階間の相違や近年課題視されている「ネットいじめ」の実態を踏まえながら、大学生に対する回顧調査を通して明らかにすることである。

学校教育における課題の一つに「いじめ」が挙げられるが、その内容や発生要因は性別、年齢、時代背景等、様々な要因が関わっていると考えられる。

また、いじめの定義に関しても、文部省・文部科学省が示す定義は1985（昭和60）～2005（平成17）年までの「自分より弱い者に対して一方的に、身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、相手が深刻な苦痛を感じているもの。なお、起こった場所は学校の内外を問わない。なお、個々の行為がいじめに当たるか否かの判断を表面的・形式的に行うことなく、いじめられた児童生徒の立場に立つて行うこと」から、2006（平成18）年以降2014（平成26）年現在にいたる「当該児童生徒が、一定の人間関係のある者から、心理的、物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているものとする。なお、起こった場所は学校の内外を問わない。」と社会状況に応じて変化しており、いじめについて検討する上では社会状況に応じて検討する視点が求められると考えられる。

* 山梨県立大学平成26年度卒業生（Graduate of Yamanashi Prefectural University, in the Class of 2014）

† 山梨県立大学（Yamanashi Prefectural University）

文部科学省が調査した 2013（平成 25）年度のいじめの認知件数は、小学校、中学校、高等学校（以下、高校と表す）、特別支援学校合わせて 185,860 件であり、前年 2012（平成 24）年度 198,109 件より 12,249 件減少したものの、依然として高い水準にあることがうかがえる。また、いじめの認知件数は、滋賀県大津市で生じた「大津市立中学校におけるいじめ」事件問題を受け、全国都道府県及び市区町村教育委員会の把握が進んだ 2012 年度に急増していることが読み取れる。

2. いじめに関する先行研究

このような学校教育における重要課題の一つとして着目されるいじめに関しては、三島（2003）、久保田（2012）等多くの先行研究が挙げられる。それらの先行研究の検討から、以下 3 つの特徴が挙げられる。

（1）学校段階間による違い

第一にいじめ内容における小学校・中学校・高校の学校段階間による違いである。その違いに関して、まずいじめの認知件数が増加し始める時期として、小学校高学年が挙げられる。この時期は思春期という複雑な年齢であり、「仲間との関わりにおいて、どのような行動をとればよいのか、子ども達は神経をとがらせ、自分がその集団のメンバーにどのように評価されているのか不安を抱えていることも多い」（有倉,2011）時期とされる。この不安を拭うために「互いの類似性を言葉で確かめ合い、仲間の中で通用する言葉を作り、通用しないものを疎外する」（黒沢・有本・森,2003）行為が、いじめのきっかけの 1 つとなる可能性が考えられる。

次いでいじめの内容についても学校段階間の差異がある事が指摘されている。小学校・中学校では一番多い内容として「冷やかしのからかい」（小学校の構成比 29.6%、中学校の構成比 29.8%）、高校では「暴力を振るう」（構成比 22.8%）、特殊教育諸学校では「言葉での脅し」（構成比 29.1%）がそれぞれ挙げられている（教育課程審議会,2000）。同様の学校段階間によるいじめ内容の相違があることについては、久保田（2012）他でも報告されている。いじめ研究を行うにあたっては、いじめ内容における小学校・中学校・高校の学校段階間による違いに着目する必要がある。

（2）ジェンダー差

第二に男子児童生徒、女子児童生徒間では、いじめ内容の違いが確認されている、つまりいじめ内容にジェンダー差が生じているという点である。

男子児童生徒、女子児童生徒のいじめに関する事例として、高校 2 年生時に殴る、蹴る、ビールの一気飲みをさせる、お金を奪う等を受けた男子生徒の事例、中学 3 年生時に所有物に悪口、目の前で悪口等を受けた女子生徒の事例が挙げられている（久保田,2001）。

男子児童生徒のいじめの特徴としては「殴る」「蹴る」といった暴力的いじめが多いとされていること、一方で女子児童生徒は「無視」「悪口」といった心理的ないじめが多いといった言及がなされている（三島,2003 等）。

三島（2003）の指摘からは、男子児童生徒は「からかう」「冷やかしの」「冗談からいじめが始まる」「おもしろはんぶん」というように、いじめ加害者側の児童生徒にとっていじめを「遊び」と捉えている可能性が考えられる。女子児童生徒においては「無視する」「仲間外れにする」といった行為は少人数の仲良し集団内で行われることが多く、いじめ加害者、いじめ被害者等の当事者以外にはそのいじめの存在が分かりにくいと考えられる。

この違いについては上記先行研究等では「いじめの認識」や「集団の捉え方」による男女の違いが考えられるとの考察がなされているが、実証的な研究はまだ充分になされていないと言え難い。

さらに「いじめられた後、どのような気持ちになるのか」という質問に対し、女子児童生徒は「落ち込んだ」「学校に行きたくなくなった」「友達が信用できなくなった」「不安・心配になった」「自分がいやになった」等の選択肢の回答率が男子児童生徒よりも高く、女子児童生徒の方が気持ちの落ち込みが激しいことがうかがえる（片

岡,2007)。このように女子児童生徒のいじめは男子児童生徒に比して影響が深刻であるとの示唆が得られているにも関わらず、いじめの存在が分かりにくいという傾向から、これまであまり研究されてこなかったという課題も挙げられている（シモンズ,2003）。

つまり久保田（2012）が「今後は男女のいじめの違いをジェンダーの視点から検討する研究が求められよう」と述べているように、今後のいじめ研究を推進するにあたってはジェンダーによるいじめ内容の特徴について明らかにする必要がある。

（3）「ネットいじめ」

第三に挙げられるのは、インターネットを媒介としたいじめに関する報告が 2000 年代後半以降複数なされていることである。

近年ではPC・携帯電話・スマートフォン等の普及により、メールやWebsite上の掲示板、SNS(Social Networking Service)等のインターネットを媒介したいじめ報告が数多くなされている。渡辺（2008）はこのインターネットを媒介したいじめを「ネットいじめ」と表現しており、本研究もこの「ネットいじめ」の用語を用いる。

ネットいじめに関しては文部科学省もその実態を問題視しており、「携帯電話やパソコンを通じて、インターネット上のウェブサイトの掲示板などに、特定の子どもの悪口や誹謗・中傷を書き込んだり、メールを送ったりするなどの方法により、いじめを行うもの」と定義づけている（文部科学省,2008）。

ネットいじめでは掲示板やプロフに誹謗中傷を書き込まれた場合、同級生は勿論、同級生以外の不特定多数の第三者にも内容が閲覧されている（つまり「さらされている」）ことが多くなる。そのため従来のいじめ内容に比べ森田（1985）のいういじめの四層構造における「観衆」や「傍観者」が圧倒的に多くなる可能性が高いのである。多くの「観衆」や「傍観者」に見られているという意識、つまりは森田・清永（1994）がいうところの「いじめの劇場化」がいじめ加害者のモチベーションを高めることになってしまい、いじめがエスカレートしてしまう1つの要因と考えられる（小倉,2013）。ネットいじめはこのように従来のいじめと異なる性質をもつ可能性がある。

今後いじめ研究を行う上では、少なくとも上述の（1）～（3）の3つの視点から検討する必要があるといえる。そこで本研究では学校段階ごとにいじめ内容の検討を行い、その中で男子児童生徒、女子児童生徒間でのいじめ内容の相違及び、近年問題視されているネットいじめに着目して本研究を行うこととする。

II 研究方法

本研究では上記研究目的を達するため、大学生を対象とした回顧法による質問紙調査を実施する。大学生を対象とする理由は、小学校・中学校・高校の学校段階間ごとのいじめの「伝聞体験」「目撃体験」について同一人物から一貫して回答が求められる点を重要視したためである。

また本研究対象とする大学生の多くが小学校から高校に在籍していたと考えられる 1999（平成 11）～2013（平成 25）年度の総務省調査「移動体通信（携帯電話・PHS）の年度別人口普及率と契約数の推移」によれば、人口普及率は 49.3%から 104.2%へ上昇している。本研究対象の大学生は携帯電話等の普及が広まった時期と小学校～高校在籍時期が重なるため、ネットいじめも生じていた可能性が否定できない。そこで本研究ではこの「ネットいじめ」も調査対象とする。

1. 調査内容

三島（2003）及び久保田（2012）等を参考にいじめ内容における男子児童生徒、女子児童生徒間の特徴を明らかにするための質問紙調査を実施する。

なお女子児童生徒のいじめの特徴に関してはレイチェル・シモンズ（2003）及び原田（2013）を参考とする。詳細は別紙資料1を参照のこと。

2. 調査方法

【予備調査】

（1）調査対象

調査対象はY大学N学科4年生25名（男性2名、女性23名）である。回収数は25部、回収率は100.0%であった。

（2）調査の実施

調査の実施は平成26年度10月中旬である。Y大学の学科学生全員集合時に一斉に配布し、個別のペースで回答を求めた。回答は無記名で依頼した。回収はその場で行った。授業終了時に回収ができない場合は、後日回収箱に提出を依頼して回収した。

（3）調査内容

研究者本人が作成したいじめに関する60項目に対し、小学校・中学校・高校の学校段階ごとに「1. 学校内で見た事聞いた事がある」「2. 学校外で見た事聞いた事がある」「3. 学校内外の両方で見た事聞いた事がある」「4. 見た事も聞いた事もない」の4択から1つの選択を求めた。

【本調査】

（1）調査対象

調査対象はY大学の合計3学部5学科にそれぞれ在籍する1年生58名、2年生35名、3年生24名の合計117名である。回収数は117部、回収率は81.3%であった。

（2）調査の実施

調査の実施は平成26年度10月下旬～11月中旬にかけてである。Y大学の5つの講義開始時に一斉に配布し、個別のペースで回答を求めた。回答は無記名で依頼した。回収は3講義についてはその場で行い、残り2講義については授業終了時に回収できなかったため、後日回収箱に提出を依頼して提出を求めた。

（3）調査内容

予備調査の結果を参考に、3項目改善を行い、新たにいじめに関する57項目と自由記述からなる質問紙を作成した。回答はそれぞれの項目に対し、小学校・中学校・高校の学校段階ごとに「1. 学校内で見た事聞いた事がある」「2. 学校外で見た事聞いた事がある」「3. 学校内外の両方で見た事聞いた事がある」「4. 見た事も聞いた事もない」の4択から1つの選択を求めた。

3. 倫理的配慮

本調査の際、いじめ加害者、いじめ被害者等が調査対象に加わる可能性を考慮して、いじめに関して、「見た事」

「聞いた事」に関して、回答を求める質問紙を採用した。

また質問紙を配布する際、研究目的および回答者の個人回答が特定されないよう統計処理する旨を説明して、回答に対する同意を確認した上で実施した。

Ⅲ 調査結果

1. 結果の概要

質問紙を集計した結果、以下の結果が得られた。

なお、4の「見た事も聞いた事もない」という項目をのぞいた3つの項目の回答結果を中心に載せ、「1. 学校内で見た事聞いた事がある」「2. 学校外で見た事聞いた事がある」「3. 学校内外の両方で見た事聞いた事がある」のいずれかに該当するものを、本研究では「見聞体験」として表記する。

Table 1～3 は男女合計の小学校から高校の学校段階別回答者数をまとめたものである。Table 内の1～3の欄は、それぞれ「1. 学校内で見た事聞いた事がある」「2. 学校外で見た事聞いた事がある」「3. 学校内外の両方で見た事聞いた事がある」の回答数を示している。

Table 1 小学校段階における見聞体験

	1	2	3
問 1 いじめ被害者本人のいる前で悪口を言う	62	5	22
問 2 いじめ被害者の悪口を書いた手紙をクラス中に回す	35	7	4
問 3 いじめ被害者に関する事実でない噂を流す	23	5	14
問 4 インターネット上に載せた顔写真に対し「きもい」「ブス」といったコメントをする	5	5	3
問 5 いじめ被害者の真似をしてからかう	54	3	22
問 6 誕生日会や遊びの機会に誘わない	39	3	15
問 7 メーリングリスト（LINE等）のグループから外す	3	2	3
問 8 殴る、蹴るなどの暴力行為を行う	19	3	8
問 9 いじめ被害者に自殺の練習をさせる	1	3	1
問 1 0 インターネット上にいじめ被害者の連絡先等を無断で載せる	0	1	0
問 1 1 いじめ被害者に掃除や課題を押し付ける	19	6	2
問 1 2 いじめ被害者が傷つくようなあだ名をつける	62	3	20
問 1 3 いじめ被害者の好きな人、付き合っている人を横取る	3	2	1
問 1 4 いじめ被害者の所有物を傷つける（例：教科書を破る等）	31	5	6
問 1 5 いじめ被害者が秘密にしていた事を周囲に広める	23	3	9
問 1 6 明らかにいじめ被害者を避けたり汚いもの扱いをする	73	2	18
問 1 7 クラス又はグループ全員でいじめ被害者がこの世からいなくなったかの様な扱いをする （例：お葬式ごっこ等）	3	3	2
問 1 8 いじめ被害者の口に無理矢理虫や汚物を詰め込む	0	1	1
問 1 9 いじめ被害者を無視する	58	1	22
問 2 0 わざとぶつかる	26	2	6
問 2 1 いじめ被害者に内緒でL I N Eのグループを作り、仲間外れにする	3	2	1
問 2 2 席の後ろから消しゴムのカスなどを投げる	45	2	6
問 2 3 弱みを握って恐喝する	3	2	3
問 2 4 お金を奪う	4	2	2
問 2 5 いじめ被害者が言った覚えのない悪口を言っていたと他の子に告げ口をする	33	1	8
問 2 6 それまで楽しそうに話していたにも関わらず、いじめ被害者が話に入ろうとすると 途端に態度が変わる	43	2	16
問 2 7 L I N Eやfacebook等でブロックやフォロー外しをする	2	1	0
問 2 8 いじめ被害者になりすましインターネット上のプロフィールにあることないことを書く	0	3	1
問 2 9 陰で脅してわざと大勢の前で恥をかかせる	4	1	1
問 3 0 いじめ被害者を呪う儀式を行う（例：いじめ被害者が写っている写真を刃物で傷つける等）	3	2	1
問 3 1 上履きの中や座布団の中に画鋲をしのばせる	10	5	4
問 3 2 「死ね」「ウザイ」「消えろ」等のひどい言葉を並べいじめ被害者のブログを荒らす	3	3	1
問 3 3 いじめ被害者にわざと嘘の情報を流す （例：集合場所や持ち物について事実と異なる情報を流す等）	3	5	5
問 3 4 いじめ被害者の所有物を捨てる	10	6	4
問 3 5 恥ずかしい格好の写真や動画をばらまく	1	2	2
問 3 6 「友達だから」と理由を付けて万引きに誘う	1	2	0
問 3 7 いじめ被害者の名前やイニシャルを示してインターネット上に悪口を書く	4	1	4
問 3 8 「バシリ」に使う（例：ご飯を買ってこさせる等）	10	2	2
問 3 9 集団でいじめ被害者を取り囲む	11	4	5
問 4 0 仲良しグループから仲間外れにする	52	1	19
問 4 1 いじめ被害者の周囲の人間関係を壊す	18	1	5
問 4 2 いじめ被害者が嫌がるようなメール（L I N E等）を送る	6	1	1
問 4 3 黒板にいじめ被害者の悪口や個人情報をかく	9	4	3
問 4 4 グループ活動の時などにわざと誘わない	34	4	14
問 4 5 いじめ被害者の名前は示さないが本人と分かる 内容の悪口をインターネット上に書く	7	4	2
問 4 6 いじめ被害者の服を脱がせ写真を撮る	1	1	0
問 4 7 いじめ被害者の教科書や机に「バカ」「消えろ」等と書く	15	3	4
問 4 8 給食の配膳の際、いじめ被害者の給食の中に唾やゴミ等を入れる	0	2	0
問 4 9 権限を利用して活動に参加させない（例：部長の権限を利用して雑用ばかり押しつけ実際の活動に 参加させない等）	1	2	2
問 5 0 いじめ被害者の髪の毛を無理矢理切る	0	2	0
問 5 1 いじめ被害者の所有物を隠す	30	4	9
問 5 2 いじめ被害者の所有物を盗む	14	3	4
問 5 3 いじめ被害者本人のいない所で悪口を言う	60	3	27
問 5 4 いじめ被害者本人のいる前で内緒話をする	46	3	19
問 5 5 冗談で傷つく事を言う	49	3	24
問 5 6 いじめ被害者の知らない所で「無視しよう」「転ばせよう」等のルールを作る	36	2	13
問 5 7 いじめ被害者を試す様な事をしてからかう（例：架空のアイドルを知っているか尋ねる等して 楽しむ等）	19	1	7

Table 2 中学校段階における見聞体験

	1	2	3
問 1 いじめ被害者本人のいる前で悪口を言う	69	5	23
問 2 いじめ被害者の悪口を書いた手紙をクラス中に回す	29	5	5
問 3 いじめ被害者に関する事実でない噂を流す	52	8	16
問 4 インターネット上に載せた顔写真に対し「きもい」「ブス」といったコメントをする	11	7	9
問 5 いじめ被害者の真似をしてからかう	52	4	24
問 6 誕生日会や遊びの機会に誘わない	35	4	16
問 7 メーリングリスト（LINE等）のグループから外す	4	4	4
問 8 殴る、蹴るなどの暴力行為を行う	23	6	8
問 9 いじめ被害者に自殺の練習をさせる	2	2	1
問 10 インターネット上にいじめ被害者の連絡先等を無断で載せる	2	2	1
問 11 いじめ被害者に掃除や課題を押し付ける	20	3	5
問 12 いじめ被害者が傷つくようなあだ名をつける	54	4	21
問 13 いじめ被害者の好きな人、付き合っている人を横取る	5	3	4
問 14 いじめ被害者の所有物を傷つける（例：教科書を破る等）	32	5	7
問 15 いじめ被害者が秘密にしていた事を周囲に広める	29	2	9
問 16 明らかにいじめ被害者を避けたり汚いもの扱いをする	63	3	20
問 17 クラス又はグループ全員でいじめ被害者がこの世からいなくなったかのような扱いをする （例：お葬式ごっこ等）	3	3	0
問 18 いじめ被害者の口に無理矢理虫や汚物を詰め込む	3	1	0
問 19 いじめ被害者を無視する	62	2	25
問 20 わざとぶつかる	25	2	12
問 21 いじめ被害者に内緒でLINEのグループを作り、仲間外れにする	4	2	5
問 22 席の後ろから消しゴムのカスなどを投げる	36	2	8
問 23 弱みを握って恐喝する	9	1	9
問 24 お金を奪う	8	2	4
問 25 いじめ被害者が言った覚えのない悪口を言っていたと他の子に告げ口をする	30	2	9
問 26 それまで楽しそうに話していたにも関わらず、いじめ被害者が話に入ろうとすると 途端に態度が変わる	49	2	17
問 27 LINEやfacebook等でブロックやフォロー外しをする	3	4	2
問 28 いじめ被害者になりすましインターネット上のプロフィールにあることないことを書く	4	2	1
問 29 陰で脅してわざと大勢の前で恥をかかせる	7	1	1
問 30 いじめ被害者を呪う儀式を行う （例：いじめ被害者が写っている写真を刃物で傷つける等）	1	1	0
問 31 上履きの中や座布団の中に画鋲をしのばせる	8	3	4
問 32 「死ね」「ウザイ」「消えろ」等のひどい言葉を並べいじめ被害者のブログを荒らす	11	6	6
問 33 いじめ被害者にわざと嘘の情報を流す （例：集合場所や持ち物について事実と異なる情報を流す等）	5	6	3
問 34 いじめ被害者の所有物を捨てる	14	4	3
問 35 恥ずかしい格好の写真や動画をばらまく	3	2	2
問 36 「友達だから」と理由を付けて万引きに誘う	3	2	0
問 37 いじめ被害者の名前やイニシャルを示してインターネット上に悪口を書く	19	3	11
問 38 「バシリ」に使う （例：ご飯を買ってこさせる等）	13	3	6
問 39 集団でいじめ被害者を取り囲む	18	6	5
問 40 仲良しグループから仲間外れにする	50	3	19
問 41 いじめ被害者の周囲の人間関係を壊す	26	2	9
問 42 いじめ被害者が嫌がるようなメール（LINE等）を送る	11	2	6
問 43 黒板にいじめ被害者の悪口や個人情報をかく	8	4	1
問 44 グループ活動の時などにわざと誘わない	35	4	14
問 45 いじめ被害者の名前は示さないが本人と分かる内容の悪口をインターネット上に書く	24	5	12
問 46 いじめ被害者の服を脱がせ写真を撮る	0	1	1
問 47 いじめ被害者の教科書や机に「バカ」「消えろ」等と書く	20	3	4
問 48 給食の配膳の際、いじめ被害者の給食の中に唾やゴミ等を入れる	3	2	0
問 49 権限を利用して活動に参加させない （例：部長の権限を利用して雑用ばかり押しつけ実際の活動に参加させない等）	1	1	4
問 50 いじめ被害者の髪の毛を無理矢理切る	2	2	0
問 51 いじめ被害者の所有物を隠す	35	3	12
問 52 いじめ被害者の所有物を盗む	16	4	5
問 53 いじめ被害者本人のいない所で悪口を言う	62	4	28
問 54 いじめ被害者本人のいる前で内緒話をする	47	3	18
問 55 冗談で傷つく事を言う	50	5	24
問 56 いじめ被害者の知らない所で「無視をしよう」「転ばせよう」等のルールを作る	31	4	14
問 57 いじめ被害者を試す様な事をしてからかう （例：架空のアイドルを知っているか尋ねる等して楽しむ等）	15	3	7

Table 3 高校段階における見聞体験

		1	2	3
問1	いじめ被害者本人のいる前で悪口を言う	30	10	7
問2	いじめ被害者の悪口を書いた手紙をクラス中に回す	3	6	0
問3	いじめ被害者に関する事実でない噂を流す	17	9	9
問4	インターネット上に載せた顔写真に対し「きもい」「ブス」といったコメントをする	9	11	4
問5	いじめ被害者の真似をしてからかう	24	4	10
問6	誕生日会や遊びの機会に誘わない	16	5	10
問7	メーリングリスト（LINE等）のグループから外す	11	6	10
問8	殴る、蹴るなどの暴力行為を行う	6	7	1
問9	いじめ被害者に自殺の練習をさせる	0	3	0
問10	インターネット上にいじめ被害者の連絡先等を無断で載せる	0	2	0
問11	いじめ被害者に掃除や課題を押し付ける	6	5	0
問12	いじめ被害者が傷つくようなあだ名をつける	21	6	9
問13	いじめ被害者の好きな人、付き合っている人を横取る	1	5	1
問14	いじめ被害者の所有物を傷つける（例：教科書を破る等）	6	5	5
問15	いじめ被害者が秘密にしていた事を周囲に広める	9	3	9
問16	明らかにいじめ被害者を避けたり汚いもの扱いをする	15	8	7
問17	クラス又はグループ全員でいじめ被害者がこの世からいなくなったかの様な扱いをする （例：お葬式ごっこ等）	1	2	1
問18	いじめ被害者の口に無理矢理虫や汚物を詰め込む	1	1	0
問19	いじめ被害者を無視する	22	4	11
問20	わざとぶつかる	7	3	2
問21	いじめ被害者に内緒でLINEのグループを作り、仲間外れにする	9	3	8
問22	席の後ろから消しゴムのカスなどを投げる	12	3	2
問23	弱みを握って恐喝する	2	4	2
問24	お金を奪う	6	1	4
問25	いじめ被害者が言った覚えのない悪口を言っていたと他の子に告げ口をする	6	5	5
問26	それまで楽しそうに話していたにも関わらず、いじめ被害者が話に入ろうとすると 途端に態度が変わる	14	4	10
問27	LINEやfacebook等でブロックやフォロー外しをする	6	4	7
問28	いじめ被害者になりすましインターネット上のプロフィールにあることないことを書く	1	3	1
問29	陰で脅してわざと大勢の前で恥をかかせる	0	2	0
問30	いじめ被害者を呪う儀式を行う （例：いじめ被害者が写っている写真を刃物で傷つける等）	0	1	0
問31	上履きの中や座布団の中に画鋏をしのばせる	0	3	0
問32	「死ね」「ウザイ」「消えろ」等のひどい言葉を並べいじめ被害者のブログを荒らす	1	4	4
問33	いじめ被害者にわざと嘘の情報を流す （例：集合場所や持ち物について事実と異なる情報を流す等）	1	4	2
問34	いじめ被害者の所有物を捨てる	0	3	1
問35	恥ずかしい格好の写真や動画をばらまく	0	2	2
問36	「友達だから」と理由を付けて万引きに誘う	0	1	0
問37	いじめ被害者の名前やイニシャルを示してインターネット上に悪口を書く	9	2	6
問38	「バシリ」に使う（例：ご飯を買ってこさせる等）	3	5	3
問39	集団でいじめ被害者を取り囲む	1	3	2
問40	仲良しグループから仲間外れにする	22	5	10
問41	いじめ被害者の周囲の人間関係を壊す	9	4	2
問42	いじめ被害者が嫌がるようなメール（LINE等）を送る	5	2	1
問43	黒板にいじめ被害者の悪口や個人情報を書く	1	3	0
問44	グループ活動の時などにわざと誘わない	9	4	9
問45	いじめ被害者の名前は示さないが本人と分かる 内容の悪口をインターネット上に書く	10	6	10
問46	いじめ被害者の服を脱がせ写真を撮る	1	1	0
問47	いじめ被害者の教科書や机に「バカ」「消えろ」等と書く	2	2	0
問48	給食の配膳の際、いじめ被害者の給食の中に唾やゴミ等を入れる	0	1	0
問49	権限を利用して活動に参加させない （例：部長の権限を利用して雑用ばかり押しつけ実際の活動に参加させない等）	0	2	1
問50	いじめ被害者の髪の毛を無理矢理切る	1	2	0
問51	いじめ被害者の所有物を隠す	4	3	5
問52	いじめ被害者の所有物を盗む	4	2	4
問53	いじめ被害者本人のいない所で悪口を言う	33	4	22
問54	いじめ被害者本人のいる前で内緒話をする	17	4	13
問55	冗談で傷つく事を言う	33	3	19
問56	いじめ被害者の知らない所で「無視しよう」「転ばせよう」等のルールを作る	6	4	5
問57	いじめ被害者を試す様な事をしてからかう （例：架空のアイドルを知っているか尋ねる等して楽しむ等）	4	2	5

各段階の見聞経験の総数をみると、小学校段階が1,684件、中学校段階が1,924件、高校段階が914件となった。この結果から森田（2000）等が示しているように、いじめの認知件数が増加しはじめる時期が含まれる小学校段階、そして中学校段階が高校段階に比べ見聞経験の数が多く見られた。

また、中学校段階、高校段階では「いじめ被害者本人のいる前で悪口を言う」「いじめ被害者本人のいない所で悪口を言う」が上位に位置しているのに比べると小学校段階では先に挙げた項目よりも「明らかにいじめ被害者を避けたり汚いもの扱いをする」「いじめ被害者が傷つくようなあだ名をつける」といった項目がより上位にあった。このことから、小学校段階ではいじめ加害者の立場にある者は「遊びのつもり」「楽しんでた」といった感覚でいじめ行為を行っていることがうかがえることから三島（2003）の示すいじめを「からかい」と捉えている背景があるのではないかと考えられる。

2. 上位回答項目について

1の結果から、小学校段階から高等学校段階それぞれの回答数についてまとめた。

小学校段階においては「明らかにいじめ被害者を避けたり汚いもの扱いをする」が93人（79.5%）で最も多く、次に「いじめ被害者本人のいない所で悪口を言う」が90人（76.9%）で2番目に多かった。

中学校段階においては「いじめ被害者本人のいる前で悪口を言う」が97人（82.9%）で最も多く、次に「いじめ被害者本人のいない所で悪口を言う」が94人（80.3%）で2番目に多かった。

高校段階においては「いじめ被害者本人のいない所で悪口を言う」が59人（50.4%）で最も多く、次に「冗談で傷つく事を言う」が55人（47.0%）で2番目に多かった。

各学校段階「いじめ被害者を無視する」、「いじめ被害者本人のいる前で悪口を言う」「いじめ被害者本人のいない所で悪口を言う」の3項目の回答数が多く、どの学校段階においても見聞体験の多い内容であることがうかがえる。

自由記述では、特に「いじめ被害者を避ける」「下学年もいじめ加害者に巻き込む」という回答は小学校・中学校・高校全ての学校段階で見られた。また、「髪の毛を燃やす」「体育（柔道）の時わざと強く技を決める」といった直接生命に関わる可能性のある回答もあり、いじめの実態の深刻さをうかがわせた。

3. いじめのジェンダー差について

いじめのジェンダー差について、調査結果を男女別かつ学校段階別に集計した。その結果がTable.6～11である。

男子児童生徒に関しては、小学校段階の男子児童では「いじめ被害者本人のいる前で悪口を言う」、「いじめ被害者が傷つくようなあだ名をつける」、「明らかにいじめ被害者を避けたり汚いもの扱いをする」「いじめ被害者本人のいない所で悪口を言う」が20人（87.0%）で最も多かった。中学校段階の男子生徒では「いじめ被害者本人のいる前で悪口を言う」が23人（100.0%）で最も多かった。高校段階の男子生徒では「いじめ被害者本人のいない所で悪口を言う」が16人（69.6%）で最も多かった。

女子児童生徒に関しては、小学校段階の女子児童では「明らかにいじめ被害者を避けたり汚いもの扱いをする」が83人（88.3%）で最も多かった。中学校段階の女子生徒では「いじめ被害者本人のいる前で悪口を言う」が74人（78.7%）で最も多かった。高校段階の女子生徒では「いじめ被害者本人のいない所で悪口を言う」が43人（45.7%）で最も多かった。

各段階別、男女別に上位1位～5位の項目をまとめると、Table 4のようになる。

Table 4 学校段階男女別上位 5 項目

	男子児童生徒		女子児童生徒	
小学校段階	1位	いじめ被害者本人のいる前で悪口を言う	1位	明らかにいじめ被害者を避けたり汚いもの扱いをする
	1位	いじめ被害者が傷つくようなあだ名をつける	2位	いじめ被害者本人のいない所で悪口を言う
	1位	明らかにいじめ被害者を避けたり汚いもの扱いをする	3位	いじめ被害者本人のいる前で悪口を言う
	1位	いじめ被害者本人のいない所で悪口を言う	4位	いじめ被害者が傷つくようなあだ名をつける
	5位	いじめ被害者の真似をしてからかう	5位	いじめ被害者を無視する
	5位	いじめ被害者を無視する		
	5位	仲良しグループから仲間外れにする		
	5位	冗談で傷つく事を言う		
中学校段階	1位	いじめ被害者本人のいる前で悪口を言う	1位	いじめ被害者本人のいる前で悪口を言う
	2位	いじめ被害者本人のいない所で悪口を言う	2位	いじめ被害者本人のいない所で悪口を言う
	3位	明らかにいじめ被害者を避けたり汚いもの扱いをする	3位	いじめ被害者を無視する
	3位	いじめ被害者を無視する	4位	明らかにいじめ被害者を避けたり汚いもの扱いをする
	4位	いじめ被害者に関する事実でない噂を流す	5位	いじめ被害者の真似をしてからかう
	4位	いじめ被害者の真似をしてからかう		
	4位	いじめ被害者が傷つくようなあだ名をつける		
	4位	仲良しグループから仲間外れにする		
高校段階	1位	いじめ被害者本人のいない所で悪口を言う	1位	いじめ被害者本人のいない所で悪口を言う
	2位	冗談で傷つく事を言う	2位	冗談で傷つく事を言う
	3位	いじめ被害者本人のいる前で悪口を言う	3位	いじめ被害者本人のいる前で悪口を言う
	4位	いじめ被害者の真似をしてからかう	4位	いじめ被害者の真似をしてからかう
	4位	いじめ被害者を無視する	5位	いじめ被害者が傷つくようなあだ名をつける
	4位	仲良しグループから仲間外れにする	5位	いじめ被害者を無視する
			5位	仲良しグループから仲間外れにする

全段階、男女双方に共通してあるのは「いじめ被害者本人のいる前で悪口を言う」、「いじめ被害者本人のいない所で悪口を言う」、「いじめ被害者を無視する」の3項目である。

また、小学校段階、中学校段階では「いじめ被害者本人のいる前で悪口を言う」という項目が「いじめ被害者本人のいない所で悪口を言う」よりも上位にある場合が多いが（小学校段階の女子児童を除く）高校段階では逆に男女ともに「いじめ被害者本人のいない所で悪口を言う」という項目の方が「いじめ被害者本人のいる前で悪口を言う」よりも上位にある。このことから、高校段階ではいじめ被害者本人の知らない所でいじめが広まっている可能性がより高いのではないかと考えられる。

特徴としては、小学校段階の男子児童に関しては上位に出てくる項目は中学校段階、高校段階とさほど変わらないが「いじめ被害者が傷つくようなあだ名をつける」「いじめ被害者の真似をしてからかう。」が中学校段階、高校段階に比べより、上位にあることがうかがえる。このことから三島（2003）の指摘通り、男子児童生徒はいじめと「遊び」の境界線が曖昧であり、周囲との人間関係を築き始めた小学校段階ではその特色が特に強いのではないかと考えられる。

中学校段階の男子生徒に関しては小学校段階から変化し、「冗談」「からかい」から「悪口」「無視」といった項目がより上位に移動してきていることがうかがえる。

高校段階の男子生徒に関しては小学校段階、中学校段階に比べ、見聞経験の数は減少しているが上位に見られる項目は小学校段階、中学校段階と共通しているものが多くある。また、選択肢2の「学校外で見た事聞いた事がある」が男子児童生徒の全段階の中で最も多くみられることも特徴の1つである。

小学校段階の女子児童に関しては同じ時期の男子児童の上位5項目と比べてみると内容は同じものが多いがその値は圧倒的に女子児童の方が大きいことがうかがえる。いじめが増加し始める時期とされる「小学校高学年」、さらに集団意識の強い「女子児童生徒」これらの条件が揃い、今回の様な結果が出たのではないかと考えられる。

中学校段階の女子生徒に関しては女子生徒の各段階の中で「いじめ被害者本人のいる前で悪口を言う」、「いじ

め被害者本人のいない所で悪口を言う」の総数が最も多かった。小学校段階からさらに集団意識が強まり、自分たちの集団に合わない者を除外、さらに追い詰めようという意識があるのではないだろうかと考えられる。

高校段階の女子生徒に関しては上位 5 項目の中に小学校段階、中学校段階では出てこなかった「仲良しグループから仲間外れにする」がある。このことから先にも述べたように小学校段階、中学校段階以上に女子同士の「集団意識」が強くなっているのではないかと考えられる。

4. ネットいじめ

全 57 項目のうち、インターネット等を使った「ネットいじめ」に関連する項目として設定したものの結果をまとめたのが以下である。ここでは学校段階ごとで比較を行うため、段階ごとにまとめた。

小学校段階においては「インターネット上に載せた顔写真に対し『きもい』『ブス』といったコメントをする」「いじめ被害者の名前は示さないが本人と分かる内容の悪口をインターネット上に書く」が共に 13 人 (11.1%) で最も多く、次に「いじめ被害者の名前やイニシャルを示してインターネット上に悪口を書く」が 9 人 (7.6%) となった。

中学校段階においては小学校段階と同様、「いじめ被害者の名前は示さないが本人と分かる内容の悪口をインターネット上に書く」が 41 人 (35.0%) で最も多く、次に「いじめ被害者の名前やイニシャルを示してインターネット上に悪口を書く」が 33 人 (28.2%)、「インターネット上に載せた顔写真に対し『きもい』『ブス』といったコメントをする」が 27 人 (23.1%) となった。

高校段階においては小学校段階、中学校段階で上位に見られなかった「メーリングリスト (LINE 等) のグループから外す」が 27 人 (23.1%) で最も多く、次に「いじめ被害者の名前は示さないが本人と分かる内容の悪口をインターネット上に書く」が 26 人 (22.2%)、「インターネット上に載せた顔写真に対し『きもい』『ブス』といったコメントをする」が 24 人 (20.5%) となった。

結果から、小学校段階の時点ですでに「ネットいじめ」が存在していることがうかがえる。早期からネットでの繋がりに依存し、いじめへと発展してしまうのはその後の中学校段階、高校段階にも大きく影響していくのではないかと考えられる。

さらに、小学校段階は全体に占める割合、その割合の男女差が中学校段階、高校段階に比べ小さいことがうかがえる。これは携帯電話の普及がまだ十分でなく、携帯電話の使用自体少なかったこと、ブログ等の使用も現在に比べるとごく少数だったことからこのような値が出たのではないかと考えられる。

中学校段階になるとその値は大きく増加し、男女差も大きく開いていることがうかがえる。また、高校段階でも同様のことが言え、段階の中の男女差の合計も高校段階が最も大きい。高校段階での携帯電話の所持は小学校段階、中学校段階以上に普及し (ベネッセ総合研究所, 2014) それに伴い、LINE や Facebook 等の使用も増加していることが大きく関係しているのではないかと考えられる。

さらに、「インターネット上に載せた顔写真に対し『きもい』『ブス』といったコメントをする」「いじめ被害者の名前は示さないが本人と分かる内容の悪口をインターネット上に書く」といった項目は各段階のいずれにおいても上位にあった。「ネットいじめ」が増加しているのは事実であるが、「悪口」といったいじめ内容は変わっていないのではないかと考えられる。

IV 考察

アンケート調査を行った結果の考察を「全体の特徴」「学校段階別の特徴」「ネットいじめの特徴」「男女のいじめの特徴」という 4 つの観点でまとめると以下ようになる。

まず、全体の特徴に関して各学校段階、男女児童生徒ともに「いじめ被害者を無視する」、「いじめ被害者本人のいる前で悪口を言う」「いじめ被害者本人のいない所で悪口を言う」といういじめ内容が上位3項目であった。後述の「ネットいじめ」などいじめ内容の変容が一部確認されたものの、各学校段階、男女児童生徒問わず生じやすいいじめ内容が存在することが確認された。

また自由記述から学校現場では「髪の毛を燃やす」、「体育（柔道）の時わざと強く技を決める」といった、直接生命に関わるようないじめ内容が生じている実態が明らかになった。

次に学校段階別の特徴に関して、小学校段階では先行研究同様に、いじめを「からかい」（三島,2003）と捉えている場合が多いこと、中学校段階ではいじめの内容は小学校段階と類似しているものの、小学校段階 1,684 件、中学校段階 1,924 件、高校段階 914 件といじめの見聞件数が最も多いことが示された。また自由記述でも小学校段階、高校段階に比べ中学校段階は多様ないじめの内容が示されていた。

高校段階の大きな特徴としては小学校段階、中学校段階に比べ見聞経験数は減少しているということ、またベネッセ総合研究所（2014）に示されるように携帯電話の所持率がそれまで以上に高いことから、小学校段階、中学校段階に比べ「メーリングリスト（LINE 等）のグループから外す」「LINE や Facebook、Twitter 等でブロックやフォロー外しをする」といった近年発達した SNS を使ったいじめが多いことがうかがえる。

「ネットいじめ」の特徴に関しては、従来のいじめ内容と同様、「悪口」「仲間外れにする」といった内容に関する項目の回答が多数見られた。また、携帯電話の所持が最も多いのは高校段階であるが、小学校段階からすでに「ネットいじめ」がみられるという結果が得られた。「ネットいじめ」への対応は小学校段階から必要であり、各学校段階で生じている状況に対応した小学校から高校まで一貫した指導が求められよう。

男女のいじめの特徴に関しては従来の研究に見られる「男子児童生徒は肉体的いじめが多く、女子児童生徒は精神的いじめが多い」という結果ではなく、男子児童生徒にも精神的ないじめに関する内容が多く見られた。さらに「殴る、蹴る等の暴力行為を行う」「いじめ被害者の髪の毛を無理矢理切る」「わざとぶつかる」「いじめ被害者の口に無理矢理虫や汚物を詰め込む」「上履きの中や座布団の中に画鋏をしのばせる」といった身体的ないじめに関する項目は、従来の先行研究からすると男子児童生徒の方が多くとされるが今回の調査では女子児童生徒の方が多く見られた。今回の調査では女性に比べ男性から得られる回答数が少なかったため、このような結果になったとも考えられるものの、女子児童生徒から相当数の身体的いじめの見聞体験数が得られたことは、今後のいじめに関する指導を考えていく上で、非常に興味深いといえる。

V 全体考察および今後の課題

本研究では性別よりいじめ内容の違いについて男子児童生徒と比較しながら女子児童生徒のいじめ内容の特徴を、学校段階間の相違や近年課題視されている「ネットいじめ」の実態を踏まえながら、大学生に対する回顧調査を通して明らかにすることを目的とした。その結果、次の点が明らかとなった。

学校段階が進むにつれ数的な変化と共に質的な変化が見られたいじめの「学校段階差」では1つの学校段階のみに着目した対応ではなく、学校段階間の繋がりを理解して上で、各学校段階に応じた一貫した指導が求められるだろう。

いじめのジェンダー差ではその存在は認められるものの、精神的いじめと身体的いじめという単純なくくりで見るとではなく、個人の背景にあるものやその時の状況等多面的にみて対応しておく必要があるといえよう。

従来のいじめとの共通性がみられた「ネットいじめ」では、媒体の違いに留意しながらも、従来のいじめ対応やいじめ研究で重要だと指摘されている視点や対応策などを参考に、今後の対応を考えていくことが必要であるといえよう。

今後の課題としては、本研究では従来のいじめ研究で得られた知見とは異なる結果が複数示されているため、より詳細な検討が求められることがあげられる。具体的には各学校段階に在籍している児童生徒に調査を実施し、実態をより詳細に検討する必要があるといえるだろう。

謝辞

本論文を作成するにあたり、アンケート調査に協力して頂いた皆様へ感謝の気持ちと御礼を申し上げ、謝辞にかえさせていただきます。

付記

本稿は第一筆者が提出した山梨県立大学人間福祉学部学士学位申請論文（2014（平成 26）年 1 月提出）を加筆・修正したものである。

引用・参考文献

1. 森田洋司（1985）「学級集団における「いじめ」の構造」『ジュリスト』836, 29-35.
2. 森田洋司・清永賢二（1994）『いじめ—教室の病』金子書房.
3. Rachel Simmons 著 鈴木淑美訳（2003）『女の子どうしてややこしい！』草思社.
4. 渡辺真由子（2008）『大人が知らない ネットいじめの真実』ミネルヴァ書房.
5. 原田恵理子（2013）「高校生におけるネットいじめの実態」『東京情報大学研究論集』17, 9-18.
6. 小倉正義・金子一史（2013）「ネットいじめを考える」『子どもの心と学校臨床』8, 60-70.
7. 加野芳正・藤村正司・浦田広明（2007）「いじめの社会学」『玉川大学教職専門シリーズ新説 教育社会学』96-110.
8. 久保田真功（2001）「いじめ被害者の反応様式—いじめ解決に至った事例の分析—」『中国四国教育学会 教育学研究紀要 47(1),232-237.
9. 久保田真功（2002）「いじめが被害者に及ぼす影響—小学生を対象とした質問紙調査をもとに—」『教育学研究紀要』48(1),223-228.
10. 久保田真功（2008）「いじめ傍観者の被害者への援助抑制理由とその規定要因に関する分析—大学生を対象とした回顧調査をもとに—」『子ども社会研究』14,17-28.
11. 久保田真功（2012）「国内におけるいじめ研究の動向と課題—いじめに関する3つの問いに着目して—」『子ども社会研究』18,53-64.
12. 三島浩路（2003）「小学校教師がイメージする男子・女子児童の『いじめ』」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学』50,123-131.
13. 大六一志（2014）「いじめに対する女子大生の意識調査」『武蔵野女子大学紀要』33, 213-217.
14. 片岡洋子（2007）「女子のいじめと人間関係」『教育』,56-63.
15. 片岡洋子（2007）「女の子の友達関係とその葛藤を考える」『教育』,86-91.
16. 有倉巳幸（2011）「生徒の仲間集団の排他性に関する研究」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』21,161-172.
17. 黒沢幸子・有本和晃・森俊夫（2003）「仲間関係発達尺度の開発—ギャング、チャム、ピアグループの概念にそって—」『目白大学人間社会学部紀要』3,21-33.

18. 文部科学省教育課程審議会「生徒指導上の諸問題の現状について」
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/003/toushin/001219.htm)
(Last access:2014.12.16)
19. 文部科学省「ネット上のいじめ」に関する対応マニュアル・事例集（学校・教員向け）
(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/11/08111701/001.pdf)
(Last access:2014.12.16)
20. 平成 25 年度 文部科学省「『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』について（3・1）
いじめの認知学校数・認知件数」
(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/__icsFiles/afieldfile/2014/10/16/1351936_01_1.pdf)
(Last access:2014.12.16)
21. 総務省 Website「移動体通信（携帯電話・PHS）の年度別人口普及率と契約数の推移」
(http://www.soumu.go.jp/soutsu/tokai/tool/tokeisiryo/idoutai_nenbetu.html)
(Last access:2014.12.16)
22. 2014 年度 ベネッセ教育総合研究所 子どもの ICT 利用調査 第 1 章 第 1 節携帯電話の利用の実態
(http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/ict_riyou/hon/hon1_1.html)
(Last access:2014.12.16)